日腎会誌 2008；**50**(5)：524-527.

日本腎臓学会 50 年のあゆみ―大島研三先生を偲んで

第 6 代日本腎臓学会理事長，杏林大学学長
長澤俊彦

はじめに

日本腎臓学会の設立に並々ならぬ貢献をされた大島研三先生は，学会創立 50 周年を待っておられたかのように，2008 年(平成 20 年)4 月 1 日に百歳の長寿を全うされて逝去された。現役時代はもちろん，現役を退かれてからも長い間わが国の腎臓学ならびに腎臓学会の発展に力を尽くされた先生を偲んで，設立当時から今日に至るまでの日本腎臓学会の発展の歴史をたどってみることにしたい。

Ⅰ．日本腎臓学会の年表

1959 年(昭和 34 年)の設立時から昨年(2007 年，平成 19 年)までの 50 年間の日本腎臓学会の歩みの大略を**表 1** に示した。大島研三先生，他 60 名の発起人により設立された日本腎臓学会は，東部・西部会の発足，国際腎臓学会の主催(会長　大島先生)，認定医制度の開始，社団法人化，英文誌(Clinical and Experimental Nephrology：CEN)の発刊，大島賞と優秀論文賞の制定など，時代のニーズに対応しながら成長して設立 50 年後の 2007 年(平成 19 年)には，会員数およそ 8,100 名の大きな学術集団に成長した。会員の専門分野をみると内科 75 %，泌尿器科 10 %，小児科 8 %，基礎医学 1.8 %，外科 1.4 %，その他 3.8 %の割合である。

第 1 回総会から第 10 回総会までの初期の会長と開催場所は，**表 2** のごとくである。大島研三先生は第 8 回総会の会長であり，それ以前の会長諸先生は，いずれも戦前から戦後にかけて日本の腎臓学を牽引してこられた方々である。基礎医学者としては，第 5 回に病理学の岡林　篤先生，第 23 回に薬理学の酒井文徳先生が会長をなさった。

表 1　日本腎臓学会のあゆみ

1959(昭和 34)年	設立(発起人　大島研三，他 60 名)
	第 1 回，2 回学術総会・日腎会誌発行
1971(昭和 46)年	東部・西部部会発足
1990(平成 2)年	国際腎臓学会主催(大島会長)
1992(平成 4)年	腎臓専門認定医制度発足
1994(平成 6)年	社団法人認可(文部省)
1997(平成 9)年	英文誌(CEN)の発行
	褒賞規定制定(大島賞，優秀論文賞)
2007(平成 19)年	設立 50 周年(会員数 8,100 名)

Ⅱ．日本腎臓学会ができるまでの日米欧の腎臓病学の歩み

近代の腎臓病学は，ロンドンのテームズ河沿いにある St. Guy's Hospital の内科フェローであった Richard Bright が 1827 年に，蛋白尿を示した患者の腎臓を剖検して腎臓に障害が起こると蛋白尿を生じることを初めて明らかにしたことに始まった。彼の剖検した腎臓の肉眼的標本と組織標本は，今日でもこの由緒ある病院の小さな展示室で見ることができる。第二次世界大戦前のヨーロッパでは，Vorhard & Fahr が 1914 年(大正 3 年)に内科的腎臓病を腎炎，ネフローゼ，腎硬化症に分類し，日本ではドイツ留学から帰国した佐々廉平先生が，この分類に基づいて 1922 年(大正 11 年)にわが国で初めて腎臓病の専門書を出版し，馬杉復三先生が 1934 年(昭和 9 年)ドイツの専門誌に，今日，ネフロトキシン腎炎または馬杉腎炎と呼ばれる腎炎の動物モデルを報告した。米国では Van Slyke が 1928 年(昭和 3 年)クリアランスの概念を発表し，Goldblatt が 1934 年(昭和 9 年)，イヌを用いて腎血管性高血圧を作った。第二次大戦中の 1942 年(昭和 17 年)にヨーロッパでは Ellis が腎炎の新しい分類を発表し，Kolff が翌年初めて人工腎臓を開発した。北米では 1940 年(昭和 15 年)に Braun と Page が別々に，アンジオテンシンを発見し，Homer Smith は 1945 年(昭和 20 年)に腎クリアランス法を発表した。戦後の日本では，大島研三，金子好宏先生が 1951 年(昭和 26 年)に健康成人の腎クリアランス測定値を発表して腎臓研究復活の口火をきった(**表 3**)。1955 年(昭和 30 年)には木下康民先生らが，日本で初めて経皮的腎生検を施行した成績を発表した(**表 4**)。Iversen & Brun がヨーロッパで経皮的腎生検法を発表してから 4 年後のことである。腎機能検査と腎組織検査がルーチンに行われるようになってから，わが国で腎臓内科医と腎臓病の臨床研究を志向する若手臨床医が増えていった。日本腎臓学会ができるまでの日米欧の腎臓病学の歩みを**表 5** にまとめて示す。ちなみに日本腎臓学会(JSN)ができた翌年に国際腎臓学会(ISN)が発足し，さらに 4 年後に欧州透析・移植学会(EDTA)，9 年後にアメリカ腎臓学会(ASN)が発足した。

表 2　初期の日本腎臓学会(会長と開催場所)

第 1 回(昭 34 年)	佐々廉平	東京(学士会館)
第 2 回(昭 34 年)	〃	東京(東京大学(医)講堂)
第 3 回(昭 35 年)	吉田常雄	大阪(大阪大学(医)講堂)
第 4 回(昭 36 年)	大森憲太	東京(慶應大学(医)講堂)
第 5 回(昭 37 年)	岡林　篤	東京(私学会館)
第 6 回(昭 38 年)	前川孫次郎	京都(京都会館)
第 7 回(昭 39 年)	勝木司馬之助	福岡(西鉄グランドホテル)
第 8 回(昭 40 年)	大島研三	東京(九段会館)
第 9 回(昭 41 年)	辻　昇三	神戸(神戸国際会議場)
第 10 回(昭 42 年)	吉利　和	東京(国立教育会館)

表 3　日本人の腎クリアランス値(cc/min)

健康成人	男性	女性
腎血流量(RBF)	893	778
糸球体濾過値(GFR)	100	95

(大島研三，金子好宏．日本臨牀 1951 より引用)

表 4　日本人の腎生検最初の報告

症例	臨床診断	組織診断
第 1 例 25 歳 男	悪性高血圧	悪性腎硬化症
第 2 例 51 歳 男	重症高血圧・血尿	動脈-細動脈硬化性萎縮腎
第 3 例 22 歳 女	悪性高血圧初期	亜急性腎炎
第 4 例 32 歳 男	真性ネフローゼ	リポイドネフローゼ

(木下康民ら．臨内小 1955 より引用)

Ⅲ．日本腎臓学会誌の発刊

1959 年(昭和 34 年)10 月に発行された「日本腎臓学会誌第 1 巻第 1 号」には『創刊の辞　大島研三，第 1 回日本

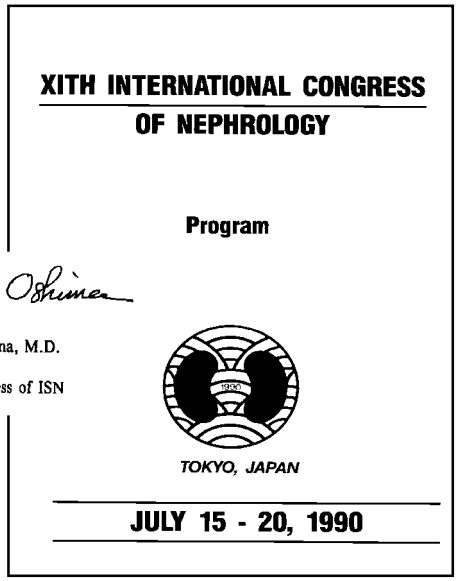
表 5　腎臓学のあゆみと腎臓学会

	ヨーロッパ	日　本	米　国
戦　前	Bright（1827） Vorhard & Fahr（1914）	佐々廉平（1922） 馬杉復三（1934）	Van Slyke（1928） Goldblatt（1934）
戦　中 （1941～1945）	Ellis（1942） Kolff（1943）		Braun，Page（1940） H. Smith（1945）
戦　後		大島研三（1951） 木下康民（1955） 日本腎臓学会（JSN）（1959）	
	欧州透析・移植学会（EDTA）（1963）	国際腎臓学会（ISN）（1960）	米国腎臓学会（ASN）（1968）

腎臓学会総会の記念講演の要旨，記念講演Ⅰ　佐々廉平（懐古談），記念講演Ⅱ　岡林　篤（日本における腎臓研究の歩み，病理から）』が掲載された。大島先生は“研究の専門化は学術の発展に伴う当然の姿ではありますが，それは究極的な総合を目的とするものと考えます。そのためには腎臓学に関係する基礎及び臨床の諸氏が一堂に介して，それぞれがまた輝かしい伝統をもつわが国の腎臓学をますます発展せしめる道であると信じる次第であります”と学問の分化と統合の意義を強調された。佐々先生は“私は腎臓病の本を書いたり致しましても，世界に新しい Weltneu という仕事は残念ながら少しもありませんで，日本で初めて Japanneu と云うはなきにしもあらずであります”と謙遜して明治以来のわが国の腎臓病臨床を回顧された。岡林先生は『日本における腎臓研究のあゆみ―病理から―』との表題で，明治時代から学会創立の年までのわが国の腎臓病の病理に関する文献のすべてを掲載する貴重な報告をされた。講演の中で岡林先生は“日本を訪れた Kimmelstiel 博士も発言されたように，1927 年（昭和 2 年）長与先生によって糖尿病の糸球体変化の見事な示説が行われ，この病変は和久と村上によって（1936 年，1941 年）詳しい記載がされました”と，結節性病変の記載は，わが国の病理学者にプライオリティのあることを強調された（ちなみに Kimmelstiel の論文は 1936 年に発表されている）。

Ⅳ．第 11 回国際腎臓学会の開催

4 年ごと（後に 2 年ごと）に開催された国際腎臓学会の第 11 回の会議が 1990 年（平成 2 年）7 月に日本腎臓学会の全面的協力のもとに，東京で大島先生を会長として行われた（**図**）。世界各地から 2,000 名を超す腎臓病研究者が集まり，10 の特別講演，30 を超すシンポジウムなど，腎臓に関するあらゆる分野のテーマが活発に討議され，非常に暑い夏日が続いたことは別として，大成功のうちに終了した。このイベントは，日本の腎臓学の実力と日本腎臓学会の組織力を国際的に示すまたとない良い機会となった。現在，2013 年頃に再び ISN の総会開催を日本に招致したいとの運動が国内で盛んであり，是非実現したいものである。



図

V．社団法人格を得てからの活動

文部省(当時)から社団法人格を得ると，学会も単なる学術発表をする集団から種々の社会的事業を行うことが可能となる。そのためには，腎臓学の発展，関連学会との関係などの資料および本学会のそれまでの腎臓学の発展に寄与した実績を所轄の文部省に提出して審査を仰ぐことが必要である。このため数年間の準備期間を経て，平成 5 年に文部省にかなり膨大な申請書類が提出された。書類作成にあたった当時の担当理事，幹事の苦労は大変なものがあった。書類を提出してから許可が出るまで年余にわたることもあると聞いていたが，意外に早く 1 年待たずに平成 6 年には社団法人の認可が下りた。これをきっかけに，学会は各種委員会を組織して，腎臓病克服のための社会活動を開始した。「腎臓病の食事療法」，「腎機能(GFR)・尿蛋白測定ガイドライン」，「腎生検ガイドブック」，「CKD 診療ガイド」，「腎疾患患者の妊娠―診療の手引き―」など，腎臓専門医向け，実地医家向けに多くの専門書と啓発書が出版された。また，アジアの多くの国々との合同国際学会やシンポジウム，アジア各国へ専門医を派遣して講演を行うなどの国際的な事業も活発に展開された。

また，法人格取得と特に関係はないが，1997 年(平成 9 年)に英文誌「The Journal of Experimental and Clinical Nephrology」(通称 CEN)が新たに発行された。これによって，名実ともに JSN は国際化されたのである。CEN の発行に伴って邦文の学会誌は，毎号たとえば“ネフローゼ症候群”といったテーマの特集と優れた 2，3 の症例報告，学会の動向の知らせを主な掲載内容とするように改変された。日本腎臓学会 8,100 名の会員のすべてが研究者ではなく，腎臓病の臨床に携わる臨床家が多いので，英文誌と邦文誌の住み分けは会員にとっても実りの多い改変となった。

おわりに

日本腎臓学会 50 年の歩みについて概括した。戦前はもちろん，戦後しばらくの研究設備や資金の乏しい時代の先人の苦労は並大抵のことではなかったと想像される。現代は研究意欲と独創的なアイデア，研究資金の獲得ができれば欧米に決して引けをとらない研究を日本で行うことが可能であり，また，優れた臨床治験を行うこともできる時代である。今後，特に若手の日本腎臓学会の会員が各個，あるいは属する集団，あるいは学会そのものの活動を通して，日本の腎臓学をますます世界に冠たるものにすることが，大島先生をはじめ日本の腎臓学を育てられた先人の期待に沿う道であると思う。